

日本労働年鑑 第55集 1985年版
The Labour Year Book of Japan 1985

第二部 労働運動

XIV 政党

6 日本共産党

1 概況

総選挙での後退

八三年一二月一八日投票の総選挙で、共産党は一定の後退を示し、八〇年六月の総選挙で失った失地を回復するにいたらなかった。共産党の選挙結果は、三議席減の二六議席、得票率で〇・五%減の九・三%、得票数で五〇万票減の五三〇万票、有権者数にたいする得票数の割合(絶対得票率)でも〇・八%減の六・五%であった。議席・得票率・得票数・絶対得票率の四つの指票のすべてで減少したのは自民・新自ク・共産の三党だけであった。自民・新自ク両党の後退は、保守支持層の棄権の結果と見られるのにたいし、非保守の野党勢力のなかで唯一共産党だけが全面的な後退を示したのは、ここしばらくの間、党勢力が頭打ち状況にあったこと、野党内で孤立化を強いられ、他党からの集中攻撃にさらされたこと、野党内の選挙協力のあおりを受けたこと、などの理由によるものと思われる。

核廃絶問題での日・ソ共産党首脳会談をめぐる動き

八三年一月、日本共産党は米ソ首脳にたいして核廃絶を求める緊急提言を送った。これにたいして、当時のアンドロポフ・ソ連共産党書記長から死去前日の二月八日付で「核廃絶に向け、日本共産党と緊密な協力をしよう」との返事が届いた。この書簡往復の結果、四月二七～二九日、核戦争阻止・核兵器全面禁止の課題にしばった日・ソ両共産党首脳会談開催を準備するための予備会談が日本共産党本部で開かれた。これには日本側から西沢富夫幹部会副委員長・国際委員会責任者、立木洋幹部会委員・国際部長など六人、ソ連側からP・N・フェドセーエフ中央委員、I・I・コワレンコ国際部副部長など四人が出席し、(1)遠からず宮本議長とチエルネンコ書記長のこの問題での、首脳会談を開く、(2)それに先立ちもう一度モスクワで予備会談を開くの二点で合意した。この第二回予備会談は、七月三～六日の四日間にわたってモスクワで開催され、日本側から金子書記局長、立木国際部長ら五人、ソ連側からポノマリョフ准政治局員、P・フェドセーエフ中央委員ら六人が出席した。会談後、金子書記局長は両党首脳会談を九月下旬か一〇月上旬にモスクワでおこなうことを予定した日程の調整もふくめ、八月下旬か九月上旬に東京で第三回予備会談を開くことを明らかにした。

役員

共産党の役員のうち、中央委員は大会で、中央委員会議長・幹部会委員長・同副委員長・幹部会委員などは中央委員会で選出され、また書記局長および常任幹部会委員は幹部会によって選出される。現在の役員は、一九八二年七月三十一日の第一六回大会第一回中央委員会総会および幹部

会で選出されたものが主体で、つぎのとおりである。ただし、八三年三月一〇日付で小島優幹部会委員は常任幹部会委員・書記局次長に、九月一二日付で緋田吉郎常任幹部会委員は書記局員・次長に、桑原信夫幹部会委員は常任幹部会委員に、八四年三月二二日付で西井教雄幹部会委員は常任幹部会委員に、それぞれ昇格することが常任幹部会で決定されている。

また、四月一〇日、一三日に開かれた八中総は、茂野嵩中央委員(和歌山県委員長)、宮田安義中央委員(島根県委員長)の二人を幹部会委員に選出し、花房紘准中央委員を中央委に補充した。

▽中央委員会議長 宮本顕治、▽幹部会委員長 不破哲三、▽幹部会副委員長 上田耕一郎、戎谷春松、瀬長亀次郎、西沢富夫、村上弘、▽幹部会委員 緋田吉郎、市川正一、茨木良和、上田耕一郎、宇野三郎、戎谷春松、小笠原貞子、岡本博之、金子満広、小林栄三、榊利夫、諏訪茂、瀬長亀次郎、高原晋一、西沢富夫、浜武司、不破哲三、宮本顕治、宮本忠人、村上弘、吉岡吉典(以上、常任幹部会委員)、阿部泰、荒堀広、石母田達、上田均、大村進次郎、木島宏、木津力松、木村昭四郎、工藤晃、桑原信夫、小島優、小山袈裟雄、紺野純一、沢田肇、定免政雄、白石芳朗、立木洋、田中昭治、田中弘、津田孝、中島武敏、新原昭治、西井教雄、西沢舜一、葦沢忠雄、浜野忠夫、古堅実吉、舛富圭一、松本善明、山下文男、山中郁子、若林暹

日本労働年鑑 第55集 1985年版

発行 1984年12月15日

編著 法政大学大原社会問題研究所

発行所 労働旬報社

2001年8月21日公開開始

■ ←前のページ 日本労働年鑑 1985年版(第55集)【目次】 次のページ → ■
日本労働年鑑【総合案内】

法政大学大原社会問題研究所(<http://oisr.org>)
